

「震災後の子ども期」を 思う

東日本大震災から3年になろうとしているいまも、2年の入居予定期間を過ぎた仮設住宅に多くの人が暮らしている。急いで確保された仮設住宅用地は公有地の校庭や公園に多い。道路には復興工事のための大型車両が行き交う。駆けまわって遊ぶ場所がないまま、発育盛りの子どもたちの3年が過ぎた。被災地では、子ども期に大切な遊びまわる環境の整備が遅れ、肥満気味、転びやすい、体力がつかないなどの身体の発達上の問題が浮上している。とりわけ福島では土に触ったり、草花を摘んだりすることを子どもに禁じながら、子育て・教育にとりくまなければならぬ。

小学校6年で震災・津波にあった子どもが中学生になった3年目に荒れだしたという現地からの声が届いた。中学生が一般的に抱えるストレスによるのか、震災による「心の傷」のストレス反応なのかはわからないが、荒れた行動の意味を探りながら進路指導にあたっている教師たちがいる。

幼くして津波で家族や友だちを亡くしてしまった子どもたちも小学校低学年になっている。当時は言葉にできなかった過酷なできごとを、教師や友だちに言葉で伝え、聴きとられ、悲しい記憶を胸に刻み込んで生きようとしている子どもたちもいる。子どもたちの傍らにいる親も教師も被災者だ。家や家族を失った悲しみや将来へのさまざまな不安を抱えながら、子育てや教育のなかに希望を見出そうとしている。

岩手、宮城、福島から届けられた大震災から3年目の子ども、学校、教師、地域の現状を見据え、共有すべき課題を考えていきたい。